

黒羽芭蕉の館だより ⑩

黒羽の芭蕉句碑 (3)

前回に続き、黒羽地区に立つ句碑(芭蕉9基、會良1基)の紹介をします。前回までに6基紹介しましたので、今回は残る4基となります。

まず、余瀨の修驗光明寺跡にはへ夏山に足駄を拝むかどでかなの芭蕉句碑(碑高108cm)が立っています。哲学者で、教育者・政治家でもあった安倍能成の筆になり、昭和34年(1959)、黒羽町観光協会が建立したものです。この句は、芭蕉が光明寺の行者堂で役行者の足駄を持した際に着想を得た句です。句意は、初夏の山なみを望みながら、役行者の足駄を、その健脚にあやかりたいとの願いをこめて拝み、出立の思いを新たにすることだ、となります。



「夏山に足駄を拝むかどでかな」(修驗光明寺跡)

同じく余瀨の西教寺(浄土真宗の境内には、へかさねとは八重撫子の名なるべし)の會良句碑(碑高130cm)が立っています。俳人の長谷川かな女筆で、昭和34年に黒羽町観光協会が黒羽町役場前に建てたものです。昭和49年に現在地に移されました。句意は、この小娘は「かさね」という名前だそうだから、なでしこならば花びらの重なった八重なでしこの名であろう、となります。

蜂巣の玉藻稻荷神社境内には、へ秣おふ人を枝折の夏野かなの芭蕉句碑(碑高111cm)が立っています。俳人の大竹孤悠の筆になる句碑で、昭和34年(1959)、黒羽町観光協会が建立したものです。芭蕉が余瀨の鹿子畑翠桃邸で開催した歌仙の発句で、句意は、秣を背負って行く人を目当てに、草深い夏野を進むことだ、となります。

そして雲巖寺臨濟宗の境内には、へ木つゝきもいははやぶらず夏こだちの句碑(碑高119cm)があります。明治12年(1879)9月の再建になる古い句碑です。寺をつつくという啄木鳥もこの庵は壊さなかつたという見え、夏木立の中に姿を保っている、という意味で、芭蕉が参禅の師仏頂和尚「山居の跡」を訪れたことにより生まれた句です。

※展示替えのため、12月13日(火)を臨時休館とさせていただきます。

■問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 22

このコーナーは、「那須野が国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、ふれあいの丘の南側駐車場から宿泊施設シャトー・エスポワールへと続く坂道の途中にある彫刻です。

一見すると岩山に横たわる自然の巨石のようにも見えますが、よく見るとそこには確かに人の手が加えられた痕跡が確認できます。材料の石は、福島県田村市と郡山市との境にある黒石山から産出した黒御影石。そこは山の名前とおり、国内随一といわれる良



月の箱船 八田 隆 1999年

質の黒御影石の産地です。

原石は13トンもある巨石でしたが、石に「矢穴」と呼ばれる穴をいくつもあけ、そこに鋼鉄のクサビである「矢」を入れて石を割るという古来の手法を用いて、こつこつと作業を進めました。作者は「石という素材を使って、その石にふさわしい「形」は何なのか」を考えながら制作しているといいます。石と正面から向き合い、やがて7トンのかけらがはがれて作品はでき上がりました。



八田 隆氏

設置場所案内図(★印)



作者は1952年鹿児島県生まれ、在住の八田隆氏。1982年に多摩美術大学大学院美術研究科を修了。鹿児島をはじめ神戸や茨城など全国各地の展覧会に出品し、多くの受賞歴もあります。

■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718